

研究テーマ；高齢者の社会的孤立・孤独感の緩和に関連する地域支援活動の実証的研究
—NPO 法人を活用している高齢者へのインタビューを中心に—

申請者：金川克子

助成対象年度：2014 年度後期

報告書原稿

研究テーマ；高齢者の社会的孤立・孤独感の緩和に関連する地域支援活動の実証的研究
—NPO 法人を活用している高齢者へのインタビューを中心に—

研究代表者：金川克子（NPO 法人いしかわ在宅支援ねっと）

共同研究者：天津栄子（NPO 法人いしかわ在宅支援ねっと）

元尾サチ（NPO 法人いしかわ在宅支援ねっと）

天野良平（金沢大学名誉教授）

I. はじめに

わが国は超高齢社会を迎えるに際しては、要介護高齢者への支援は重要であるが、できるだけ介護状態に陥らないことが高齢者はもちろんのこと家族や周辺の人々にとっては重要である。

国は地域包括ケアや在宅ケアに大きく舵を切り、校下を見据えての生活圏を設定したシステムとしているが、地域住民には十分に機能していなく、また当事者である高齢者のニーズを把握し切れていないように思われる。

高齢者に関する課題は、議論や支援すべきことは多岐にわたっているが、高齢者の社会的孤立や孤独感も地域社会では大きな関心事である。

高齢者の社会的孤立は寿命の伸びとともに、家族の変動や就労状況の変化も相まって、やむなく独居に至るケースや高齢者自身のひとり暮らし志向の高まりもみられることにより、社会問題ともなっている。

また、近隣社会では地域住民の結びつきが以前と比して希薄になっていることは周知の事実であるが、健康指標との関連から見て、社会的孤立の基準が十分に検討されておらず、その根拠の甘さも指摘されている。

また、社会的孤立は客観的な状況であり、孤独感の主観的な状況ともいえるが、両者の関係は個別性を抜きにしては検討できないと考える。

ところで、どのようにして高齢者の社会的孤立や孤独感を地域で支援していくかは重要であり、たとえば、「見守り」や「配食」「ことばかけ」等の活動は、すでにいくつかの自治体やボランティアで組織されており、その効果や方法を参考にしながら発展させていくことは意義があると考えられる。

私どもは、平成23年1月からNPO 法人をたちあげ、金沢市の一地区に活動拠点をもち、周辺の住民に憩いの場を提供しているが、この活動も高齢者の社会的孤立や孤独感の緩和の一助になるのではと考える。

そこで、NPO やボランティア組織が高齢者の社会的孤立や孤独感の緩和に役立つものか否かをこれら組織の考えや高齢者のインタビューを通して考えてみたい。

II. 調査研究の目的：

目的は高齢者の社会的孤立や孤独感についての NPO やボランティア組織の実態と考え方と、高齢者へのインタビューを通して、NPO やボランティア組織が高齢者の社会的孤立や孤独感の緩和に関連する地域支援活動の一助になりうるかを明らかにすること、である。

III. 方法と対象：

調査研究は 2 段階とした。

第 1 段階は平成 26 年度版石川 NPO.ボランティア交流名簿（公財）（石川県民ボランティアセンター編）より、活動分野が保健・医療・福祉を領域としている石川県のすべての団体 265 を対象に郵送によるアンケート調査を行った。アンケート用紙が回収されたのは 71 団体であった。

なお、保健・医療・福祉の活動分野の中には障害者（児）、子供、行政との関連の強い団体がふくまれていた。

第 2 段階は主に上記の対象団体のうち、高齢者 18 人に分担研究者による面接調査を行なった。共同研究者は面接（インタビュー）調査のベテランであるが、面接に際しての留意点として、高齢者の属性や把握するに必要な事項については確認し、統一した。

倫理的配慮：

石川県立看護大学の倫理審査をうけた。

特に倫理的配慮として、アンケート作成に際しては安全性、有害事象に関しては特にないと考える。

面接調査では答えにくいことがあればあえて答える必要性がないこと、本人の希望があればその場で面接を中止すること、面接場所は本人が利用している所かまたは本人が希望する所とすること、時間はおおむね 40 分程度とすること等を説明した。

IV. 集計・分析

アンケート調査は SPSS でまとめた。

V. 結果：

1. 第一段階の結果

1) アンケートの回収状況

アンケート用紙を郵送した 265 団体のうち住所不明等の理由により、戻ってきたも 9 団体があり、256 団体が郵送できた対象とし、そのうち 71 団体（27.3%）を有効対象とした。主な結果は表に示した。なお、質問用紙は巻末に添付した。

2) 対象集団の特徴

表 1 は対象 NPO やボランティア組織等の対象団体の特徴である。

対象団体の特徴の主な特徴では活動の拠点は 90%が有しており、定期的な事業は 70%以上

が行っていた。常時専念している人がいる団体は 60%以上に見られた。しかしイベント等の協力者は半分程度はボランティアに頼っている状況である。

3) 対象集団の考え方

団体の責任者が NPO やボランティア活動をどのように考えているかを見たのが表 2 である。それによると、活動上の問題ありと考えているのは 93%であり、ほとんどの者が活動上の問題を考えている。

地域への貢献度については 85%以上が貢献を感じていた。

高齢者の孤独や孤立防止への貢献については 10 点の点数制とし、0 点や貢献なし、点数が増えるにしたがって貢献ありとすると、6 点以上としたものはおおむね 52%みられた。5 点以上の半分以上でみると、67%であった。

活動の将来性についても同様に点数制でみると、6 点以上は 50.7%であり、5 点以上でみるとおおむね 80%であった。

活動の発展に必要な経済的基盤ありとするものは 71.8%、人材の課題がありとするものは 80.3%であり、それぞれの項目でなしとするものより多かった。それに対して、活動の拠点の課題ありとするものは 38.0%に対して、なしとするもの 53.5%であった。

活動内容の課題ではありとするものは 49, 3%、なしとするもの 40, 8%とおおむね類似していた。

表 1. 対象集団の特徴 (71 団体)

項目	頻度	数 (%)
活動の拠点の有無	あり	64 (90.1)
	なし	7 (9.9)
定期授業の実施の有無	あり	51 (71.8)
	不定期	6 (8.5)
	なし	12 (16.9)
	無回答	2 (2.8)
常時活動に専念している人の有無	いる	47 (66.2)
	いない	21 (29.6)
	無回答	3 (4.2)
イベントの協力者の有無	常勤でいる	7 (9.9)
	ボランティアでいる	35 (49.3)
	常勤・ボランティア	20 (28.2)
	いない	5 (7.0)
	無回答	4 (5.6)

表2. 責任者（代表者）の活動に関する考え方（71団体）

項目	頻度	数 (%)
活動上の問題の有無	ある	66 (93.0)
	なし	2 (2.8)
	無回答	3 (4.2)
地域貢献への有無	感じている	61 (85.9)
	感じていない	5 (7.0)
	わからない	3 (4.2)
	無回答	2 (2.8)
高齢者の孤独孤立防止への貢献有無 (点数制、0：貢献なし 10：貢献大)	0～4点	19 (26.8)
	5点	11 (15.5)
	6から10点	37 (52.1)
	無回答	4 (5.6)
活動の将来性 (点数制 0：貢献なし 10：貢献大)	0～4点	8 (11.3)
	5点	21 (29.6)
	6～10点	36 (50.7)
	わからない	2 (2.8)
	無回答	4 (5.6)
活動の発展に必要な 経済的基盤の有無	あり	51 (71.8)
	なし	14 (19.7)
	無回答	6 (8.5)
活動の発展に必要な 人材の課題の有無	あり	57 (80.3)
	なし	8 (11.3)
	無回答	6 (8.5)
活動の発展に必要な 活動拠点の課題	あり	27 (38.0)
	なし	38 (53.5)
	無回答	6 (8.5)
活動の発展に必要な 活動内容の課題	あり	35 (49.3)
	なし	29 (40.8)
	無回答	7 (9.9)

2. 第二段階の結果（高齢者のインタビューの結果）

高齢者17人について面接（インタビュー）を行った。

面接内容は当事者の発言を、テープ又はその場で書留めをしての内容である。

高齢者が利用しているNPOまたボランティア組織の活動には特徴がみられるので、面接の対象である高齢者を3群にわけ、ここではまず継続的な活動をしているNPO法人とボランティア組織を利用している高齢者9人の結果を示す。

高齢者の面接（インタビュー）調査の内容は半構成的質問であるが、次の質問は統一した。

- ① POやボランティア活動を利用している動機
- ② 社会的孤立の課題に対して、本人が思っている事
（原因でもよいし、どのような状況と考えるか、 定義的なことでもよい
また、現在利用しているNPOやボランティア活動と関があるか等）
- ③ 孤独感の緩和に、どのように対処されているか

高齢者の特徴は男3人、女6人であり、年齢は72才～87才である。

家族構成は1人暮らし2人、2人暮らし2人、3人暮らし2人、4人暮らし3人である。

それぞれの質問項目に沿って被面接者の言葉で内容を記載した。

- ① NPOやボランティア活動を利用している動機について：
 - A：友達に紹介9年前より利用している。 皆と一緒に話すのが楽しい。
此処はよいところ
 - B：ここの責任者に誘われて参加している。よかった。
 - C：ここの責任者とは友達であり、それが縁で参加している。楽しい。
 - D：2年3か月前より利用している。 つながりが大切であり、いろいろな人との話も聞けて良い、ここでは感謝
 - E：家から近いし、親しみあり
 - F：家から近いし、同年年代の人の話が聞けるし、同年年代の人と話をすると安心するし、楽しい。
 - G：昔からの友達がいないので、週1回利用している。
 - H：妻がなくなり、一寸さみしいと思い、ここを利用している、いろいろここで手伝えることが楽しいし、性格に合う。
 - I：友達から紹介されて利用、楽しいし、来れるときに来ている、食事もあるしグループにも参加している。

② 社会的孤立の課題に対して本人が思っている事

- A：そんな気持ちになったことない、班長（16 軒対応）が手厚く回ってくれる、民生委員は年に 4～5 回まわり、カイロや弁当を届けてくれる、隣近所仲が良く、おっそわけや雪かきもしてくれるし、都合がよい
- B：孤立というものを感じないし、寂しいとは思ったことはない
- C：孤立や孤独とは思わないし、孤立についてあまりかんじない。これまで、祖母の教えや幼少のころからの図書館通い、読書等を通して感謝、あり難いと思うことが身についている。
- D：孤立について感じない、友達がいるし、若いときは畑作業をし、今は転倒や認知症、食事、睡眠に気を付けている。
- E：孤立という言葉は淋しい言葉であり、横のつながりの大切さを思う。おしゃべり好きであり、誘うことが孤立の防止となり、対応している。
- F：社会的孤立の課題には大きなことはない。自分のは孤立感とは違う、横のつながりがないと孤独になるよ。
- G：取り留めもない話をするだけなのに、親しい友達が来ているときは活用している。
- H：自分たちではそんな風に思わない、自分は全然寂しくはない、不満とか心配はない。
- I：社会的孤立は感じない、考え次第であり、自分の世界を持つことは外に出て顔見知りになることは大切。

③ 孤独感の緩和にどのように対処しているか？

- A：家にいるとホッとす。家ではテレビを見たり本を読んだりしている。自分の期の持ち方である。
- B：寂しいとは思ったことはない、月に 1 回はバスで金沢に出かけている、近江町辺りでブラブラしたり、飲み屋で 1 杯飲むのが楽しい、バス代は片道 1900 円もかかり、高いが。
- C：退屈と思ったことはない、ここに来るのが楽しい、1 日の過ごし方は計画的でプラス思考、朝早く洗濯、掃除、北国新聞をしっかりと読む。
- D：元気が 1 番で、朝 4 時か 5 時に起きる、それから体操、カルタ、テレビ、夫の写真と対話、食事管理、間食はしない、感謝の気持ちを持つこと
- E：人のつながりを大切にすること、同年代同志の会話、傾聴が楽しい、
- F：過去のことを思い出す。1 人でいたら考えてしまうので、NPO を利用している。
- G：慣れと我慢、他人の助けで解決できなく、自分で努力すること。
- H：話を聞いてくれるとよい、このような施設があるとよい、

人の嫌なことはしない、キリスト教の奉仕のこころを大切にしている。

I：自分のしたいことは誰も教えてくれないので、自分の思い、考え方次第である。

VI. 考察

1. 第一段階の考察

活動の拠点や定期事業の実施、常時活動に専念している人は半分以上の団体でみられており、活動領域が保健・医療・福祉の分野では拠点を持つての活動がなされていると考えるが、常勤の人は少なく、NPOやボランティア組織の活動の特徴といえる。

責任者又は代表者が組織をどのように考えているかについて、ほとんどの団体が活動上の問題点を感じている。しかし、地域への貢献度はおおむね90%が貢献ありと感じている。

本論の高齢者の孤独や孤立防止への貢献度はありと感じているといえる。

活動の将来性に関してもありと考えているように見える。しかし発展に必要なこととして、経済的基盤や人材の課題は70%以上に見られている。

NPOやボランティア組織等の組織論を論ずることが本稿の目的ではないので、割愛するが、高齢者の孤独や孤立防止には意義があると考ええる。

2. 第二段階の考察

① 高齢者がNPOやボランティア活動を利用している動機について

A～Eが利用している施設がある地区は小さな農村地帯であり、公共交通機関は数が少なく、移動には自家用車が多く使われているが、若い人は都会に移る傾向があり、高齢者の足の確保が課題であるが、人々の交流やつながりを大切にしていると推察されるが、当施設も家族の送迎や代表者自ら送迎している。利用者は1日概ね 人であり、活動の拠点は定期的に1週間に1回活動している通所の場所があり、最近ある事情で活動の拠点をもとの場所の近くの寺院に移った。しかし、そこでの1日の活動内容はこれまでと同じである。

高齢者が利用している動機は施設の代表者との関係が強く、この施設を利用することを楽しい、親しみあり、良かったと好評の評価を得ている。

F～Iが利用している施設がある地区は市街地ではあるが閑静な住宅街にあり、公共交通機関の数が少なく、家族の移動には自家用車が多く、昼間は高齢者のみの世帯が多いようである。活動の拠点は定期的に1週間に2回活動している通所の場所があり、1日概ね10人が利用している。予防活動を中心としているが、看護相談や健康相談にも対応しているが、高齢者には憩いの場として利用でき、食事や飲み物の提供をしており、1日の過ごし方は利用者の自由に任せている。

あそびどころを取り入れた運動やヨガ、情報の交換、認知症予防、出前講座等を取り入れたプログラムを一応作成している。

F～Iの高齢者の利用の動機は家から近いことを挙げている人も見られるが、同年代の人との交流、会話や、安心感、楽しさ、食事提供等である。

② 高齢者の社会的孤立に関する反応について

A～Iの大部分の高齢者は社会的孤立や孤独感を感じないとしている。

農村地区を背景にしたA～Eは人との交流を強く感じており、Aでは地区の人々の支えを受け入れており、CやD、Eはこれまでの生活歴からの行動を通して、自己をしっかりと見つめ、確立しているように思える。

F～Iは若いときにこの地区に移動してきた人が多いと思われるが、現在は市街地の閑静な住宅街に住んでいる人である。

横のつながりを持つことの重要性を指摘しているが、社会的孤立に関しては自分の考え方次第であり、自分を大切にしている側面がみられる。

③ 孤立感の緩和の対応について

A～Iの大部分の高齢者は孤立や孤独感は、感じていなく、あまり問題にしていなであるが、緩和の対処方法は各自工夫がみられる。

例えばテレビ観覧、読書、体操、亡き人の写真での対話、同年代の人とおしゃべり、別の地区への遠出等がみられる。一方、自分を律する姿勢や信念をもっており、それぞれが自分に合った方策を持っていると思われる。

VII. まとめ

第一段階のアンケート調査から保健医療福祉の分野で活動しているNPOやボランティアの組織では経済的基盤や人材に関する課題があるものの、地域貢献や高齢者の社会的孤立や孤独感の緩和には意義があり、おおむね役割を果たしていると思われる。

高齢者への面接（インタビュー）調査では、社会的孤立や孤独感はみられなかった。もしかして、利用しているNPOやボランティア組織の影響が功を奏しているのかもしれない。

社会的孤立や孤独感は、多様な要因が重なり合って見られる現象であるが、その支援策は大切なことであり、その輪の中にNPOやボランティア活動が含まれることを望むものである。

この研究にご協力を頂いたNPOやボランティア活動に深謝するとともに、快くインタビューに応じて下さった高齢者に厚くお礼申し上げます。

なお、この研究は2014年度「公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による」

